

大阪府北河内地域の災害痕跡・記録と『浸水日誌』

實盛 良彦・田中 香里（四條畷市教育委員会）

はじめに

大阪府北河内地域では、考古学的調査や文献史料によりいくつかの災害痕跡・記録が判明している。それらは災害史を検討する上で貴重な資料であるが、これまで取り上げられる機会はそれほど多くなかった。四條畷市立歴史民俗資料館では、第 38 回特別展として、「天ニ不時之災害ヲ起ス有リ 後ノ記憶ト為ス 一遺跡と記録にみる災害と防災」と題して 2023 年 10 月 3 日から 12 月 10 日にかけてこれらの資料を集めた展示をおこなった。その際に、いくつかの災害について防災的観点からの知見を得るとともに、明治 18 年淀川洪水を詳細に記録した『浸水日誌』の再検討をおこなった。本発表では、それらの災害痕跡・記録について示すとともに、『浸水日誌』の防災意識についてあらためて報告したい（註 1）。

1. 考古学的調査にみる災害痕跡と防災

（1）生駒断層と四條畷

平成 7 年（1995）1 月 17 日に発生した兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）をうけ、通商産業省工業技術院地質調査所（当時）が全国の主要活断層の活動履歴調査をおこなった。調査の対象となった活断層の中には生駒山地と大阪平野との境界にある生駒断層帯が含まれ、四條畷市内の城遺跡でも平成 8 年（1996）に調査がおこなわれた（下川・寒川ほか 1997）。

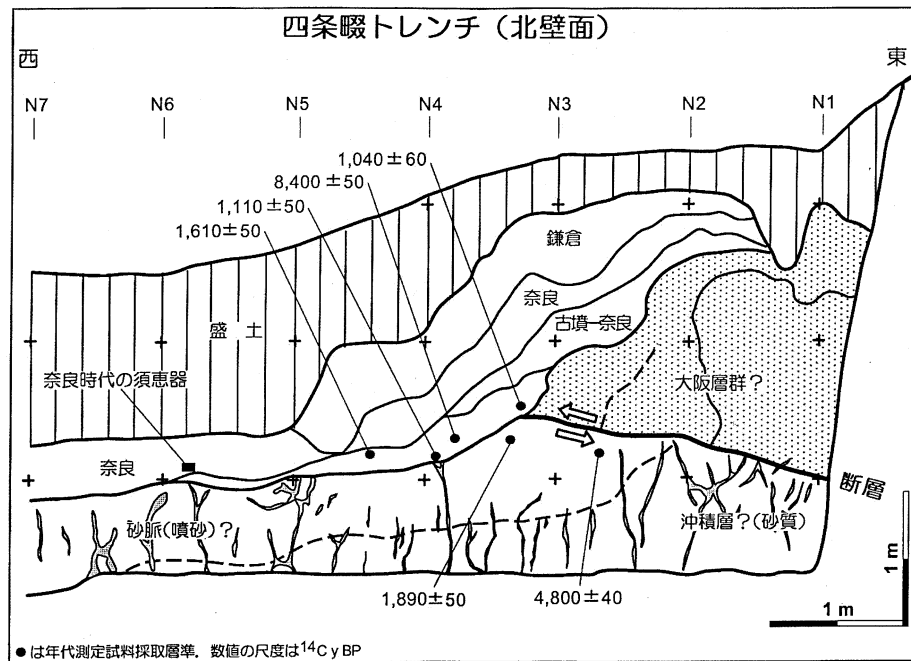
城遺跡は、古墳時代から中世に至る複合遺跡である（村上 2006）。埋蔵文化財調査に引き続いておこなわれた活断層調査の結果、地下 2 m の位置で幅 3 cm、長さ 2.4 m、傾斜角度 11.5 度で西側方向に立ち上がる断層が確認された（第 1 図）。断層が活動した後に一部が削られ、そこへ新たに堆積した土層から奈良期の須恵器杯（第 2 図）が出土した。さらに、その下層からみつかった炭化物などを放射性炭素年代測定法により分析した結果、お



第 1 図 生駒断層の検出状況



第 2 図 出土須恵器杯



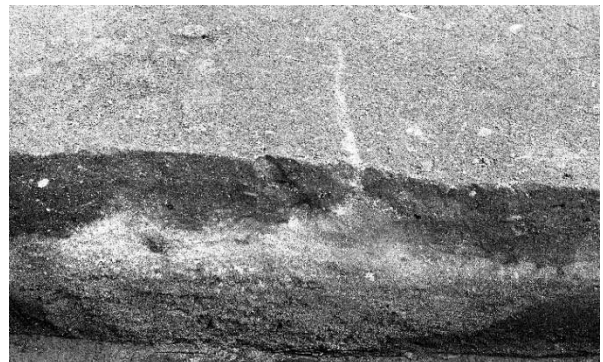
第3図 活断層調査トレンチ図（下村・寒川ほか 1997 より）

よそ 2000 年前の年代を示した（第3図）。これらのことから、この断層が前回活動したのは約 2000 年前より新しく、奈良時代より古い時代ということが判明した。

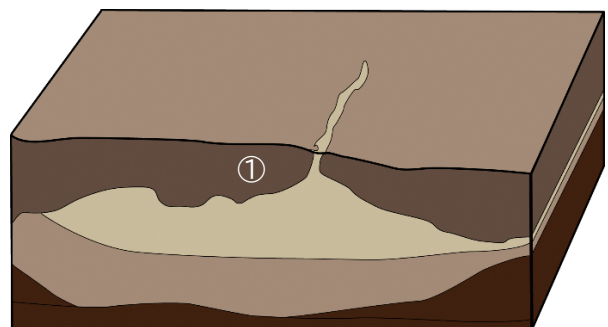
（2）四條畷市域検出の液状化痕跡と南海トラフ地震液状化現象想定域

平成4年（1992）から平成5年にかけて、大阪府立四條畷高等学校体育館の新築に伴い、雁屋遺跡の発掘調査がおこなわれた（佐久間 1995）。この調査で、弥生時代中期～後期の集落跡などと共に噴砂が検出された（小浜 1996）。

噴砂は地震により起こった液状化の痕跡である。規模の大きな地震が起こると、砂の地盤は地下水と砂が分離し、水が吹き上がり地盤が液体のようになる。この際、地表に砂が混じった水が吹き上がったものが噴砂である。この痕跡が残っているということは、その場所で強い揺れが発生したことを意味する。



第4図 雁屋遺跡の噴砂（大阪府教育委員会提供）



第5図 雁屋遺跡の噴砂 模式図

雁屋遺跡の噴砂は弥生時代後期後半（約 1800 年前）の層（第 5 図の①）を突き抜けている（第 4・5 図）。このことから、噴砂の原因となった地震は弥生時代後期後半以降に発生した地震であり、可能性としては南海地震が考えられるという（小浜 1996）。

四條畷市は生駒山系を挟み西部地域と東部地域に分かれる。このうち西部地域の土地特性については、『四條畷市地域防災計画』（四條畷市防災会議 2023）に詳しくまとめられており、次のように述べられている。

西部地域は「上町台地と生駒山地との間に広がる河内平野の中央東部にあたる」。「縄文海進時（約 6,000 年前以後）に堆積した沖積層が最大層厚 20m 以上で分布する。沖積層の地盤構成は、下部が砂をシルト質粘土、中部は暗青灰色海成粘土、上部は砂からなるが層厚の変化が著しい。なお、砂と泥からなる沖積層は、一般に細粒分に富み含水比が高く、また、粘土層は非常に軟弱で、地盤沈下等の素因となっている」。この地域は市内の「主要河川の扇状地や三角州の進出によって形成された氾濫原で北部には農地として氾濫平野がそのまま残されている部分もあるが、大部分は市街化に伴って盛土が行われている」（四條畷市防災会議 2023）。

雁屋遺跡が所在する地域は四條畷市の中でもこのような特性をもつ市内西部地域に位置する。この地域においては、現代においても液状化現象の発生の可能性が指摘されている。大阪府が 2013 年 8 月に算出した、南海トラフ巨大地震レベル 2 想定での液状化の可能性を記したデータを確認すると（大阪府 2013）、当該地点の液状化の可能性を総合的に判断するための指標である PL 値（液状化可能性指数）が 15～20 と算出されており、液状化の可能性「大」と分類されている。このことから、雁屋遺跡の範囲は、液状化の危険性の高い地域に当たる。

このように、雁屋遺跡の液状化痕跡事例は、南海トラフ巨大地震における液状化現象の発生が想定されている地域において、過去の南海地震の発生時に液状化現象が実際に起こったことを伝える好例である。

2. 四條畷市権現川流域の江戸期および昭和期における災害経過の一致

（1）天明 6 年 6 月豪雨とその記録

四條畷市域の災害においては、江戸期および昭和期において災害経過が一致する事例が確認できる。災害箇所は同市内の権現川流域で、いずれも豪雨による災害である。

権現川は四條畷市と大東市を流れる。寝屋川の支流で、淀川水系に属する一級河川である。四條畷市南野の山間部が源で、北西流してきた流れは同市南野六丁目で南西に向きを変え、大東市深野北で寝屋川に注いでいる。

江戸期の事例は、天明 6 年 6 月 13 日（1786 年 7 月 8 日）に発生した。午後 6 時ごろから降り出した雷鳴を伴う豪雨のため、一気に権現川が増水し、堤や野道、橋を押し流し、山沿いが崩れるという災害であった（山口 1979、山中 2022）。土砂と水が一体で押し寄せてきたという。人々は子どもや高齢者を高所に避難させ、道路も断ち切られる中、田畑修理のため命がけで野山へ流れてきた水を放流した。しかし、「土砂水」には抗いきれず、谷が崩れたり権現川が堰止められたりするなど大きな被害



第6図 天明6年6月豪雨による被害の状況

が出たという。この記録は、災害被害を被った南野村（現四條畷市南野）の庄屋の筆による扣帳に記されていたものである（註2）。

災害状況は順を追って詳細に記録されていた（第6図）。その記録によれば、①最初に飯盛山北東の山地が水で覆われ（註3）、②次に別の山地では谷が崩れ出した（註4）。③続けて飯盛山北原で水車稼ぎの家が土砂崩れで崩壊したうえ権現川がせき止められた（註5）。④その後は南野村と中野村で立ち会っていた分水のための石造物などがすべて流失し（註6）、⑤続けて滝村で個人宅の水車場・土蔵・石垣が流失し（註7）、⑥畑村の弥勒寺では石垣が崩壊流失した（註8）。⑦さらに畑村で複数の個人宅地の流失が続き（註9）、⑧畑村から中津川村まで井路道橋ことごとく流失し（註10）、⑨ついに川崎池では南堤を切り落とす事態に陥り（註11）、⑩東高野街道筋が60間（約109m）通行不能となった（註12）。中津川村の21歳の男性が水死したほか2人が亡くなり、亡骸は南野村に隣接する北条村（現大東市）西の切れ所に流れ込み、もらい受けて葬ったという（註13）。

（2）昭和28年台風第13号による豪雨災害

昭和期の事例は、昭和28年（1953）9月25日に襲った台風第13号によるものである。この台風による豪雨災害では、四條畷市内に甚大な被害があった（大阪府編1954、山口編1972、實盛2022b）。当時の四條畷町では人口の三分の一を超える3671人が被災し1人が亡くなり、全壊・流失36をはじ



第7図 昭和28年台風第13号による被害の状況

め708棟の建物被害があった。さらに、権現・清滝・岡部・讃良川が氾濫したうえ堤防決壊も12箇所、国道大阪四日市線（現163号）が清滝で450mにわたり崩土に覆われたのをはじめ道路被害42箇所、崖崩れ150箇所を数えた。田原村でも上田原天野川上流での土砂崩れに始まり、7棟の建物被害、上田原で府道住道郡山線が80m崩壊など50箇所の道路被害があった。当時、現四條畷市内の権現川、清滝川の流域などでは、河川の水流を利用した水車による製粉業が栄えており、権現川流域に約20基、清滝川流域には約10基の水車があったが（近藤1972、實盛2022a）、この台風により市内の水車製粉業に壊滅的な打撃があった。水車小屋は基礎の地盤ごと破壊される状況であり、被害を受けた製粉業者では廃業あるいは電力利用への転換を図るなど対応を迫られることとなった。

特に権現川流域の被害状況は凄惨で（註14・第7図）、①室池より低い位置に水車用水のため造られた水車池が決壊し、②飯盛山東部の山腹崩壊も著しく、③川筋の家屋や水車群が倒壊・流失、④その瓦礫がさらに氾濫を呼び、⑤下流の川崎方面は水没、田畑も流失・埋没著しく、この世のものとは思えない状況だったという。

（３）災害経過の比較と防災

上記のとおり、天明６年６月豪雨と昭和２８年台風第１３号では、権現川筋において近似した災害経過を辿っている様子が伺える。両者ともに、川の上流部において山地での滞水や池の崩壊など最初の被害が起きる（天明①・昭和㉔）。次に山腹部で谷部を中心として崩壊が起こる（天明②・昭和㉕）。続いて、川筋で水流を利用して操業していた水車が倒壊・流失し、瓦礫により河川が堰き止められる（天明③・昭和㉖～㉗）。並行して川筋の家屋群や構造物が倒壊・流失する（天明④～⑧・昭和㉘～㉙）。そして、下流において田畑の埋没や、池および街道への被害が起きている（天明⑨～⑩・昭和㉚）。

以上に詳細を比較してきたように、権現川流域における天明６年６月豪雨と昭和２８年台風第１３号の災害は、上流に始まり下流へと被害が拡大していく状況が一致していることがわかった。詳細過程までみても、水車が倒壊してその瓦礫により川が堰き止められ、それが契機となってさらに下流まで被害が及ぶという同一の経過を辿っている。いずれも上流で谷部の土砂崩れや山腹崩壊が起こっていることも併せ、防災の対策検討上示唆的である。過去の災害を複数検討することで、防災対策上の知見を得ることができることを示す事例のひとつといえるだろう。

３．『浸水日誌』にみる明治１８年淀川洪水の災害記録と防災意識

（１）明治１８年淀川洪水の概要

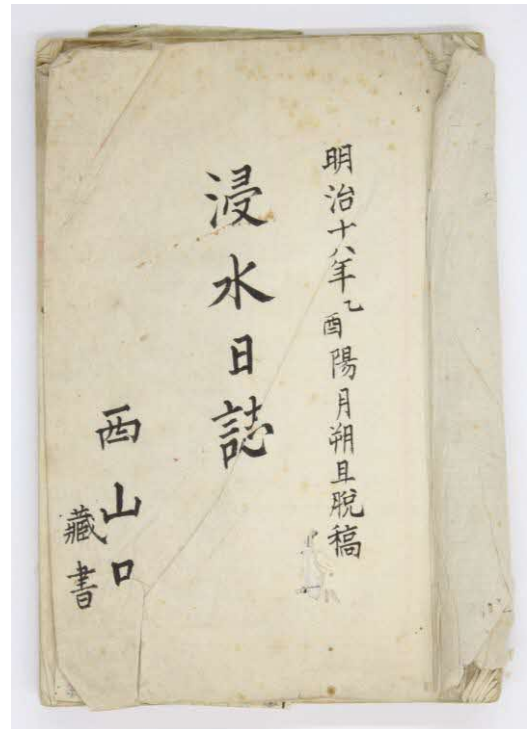
明治１８年（１８８５）、６月上旬から雨が降り続き、１５日夜から豪雨となった。そのような中、６月１７日に岡新町村（現枚方市）の天野川堤防、三矢村（現枚方市）の淀川堤防、伊加賀村（現枚方市）の淀川堤防が決壊し、氾濫、堤防決壊多数により大阪市内まで浸水が及んだ。水は淀川の支川寝屋川にまで及び、同川の徳庵堤も決壊の危機に瀕したため、野田村（現大阪市都島区）の堤防を切り開いて淀川へ排水した。伊加賀村の決壊箇所は緊急で修復する堰き止め工事が進められたが、６月２７日から再び降雨し、やがて暴風雨となったことで、工事が７割ほどしか進んでいなかった同堤防は７月２日に再決壊した。この２回目の洪水では寝屋川堤防（徳庵堤）も決壊し、寝屋川以南の現四條畷市・大東市・東大阪地域などまで被害が拡大した（淀川左岸水害豫防組合編 １９２９、武岡編 １９３１）。このように、明治１８年淀川洪水では、２度の淀川堤防決壊をはじめとした氾濫、堤防決壊多数により現枚方地域から大阪市内まで河内平野一帯を大洪水が襲った（第８図）。大規模な被害を引き起こした淀川堤防の決壊箇所から「伊加賀切れ」とも呼ばれる。

（２）『浸水日誌』について

この洪水に臨んで、その記録を詳細に残したのが蔀屋村（現四條畷市蔀屋本町）の山口米太郎氏である。山口氏は当時２１歳で、後に甲可村（四條畷村の前身）村長を務めた。その記録『浸水日誌』は、明治１８年１１月１日の完成で、枚方で堤防が決壊した翌６月１８日から、８月２５日に至る日記形式の記録を主とし、後に明治１９年（１８８６）１１月７日に三矢村（現枚方市）でおこなわれた洪水記念碑の建碑式の記録を追記したものである。迫真性の高い記述で、情報が錯綜する中、実際に洪水が

広がるまでなかなか災害情報を信じることができない有り様など、当時の状況が克明に記録されている（第9図・山口 1983）。

その記述によれば、当初は決壊が本当のことと信じられず（註 15）、村役場からの使いが走り告げるのを聞いて初めて信じたという（註 16）。門真の親戚に伝えるが信じてもらえず、水が来て初めて周章狼狽する有様であった（註 17）。6月29日に至り大雨で葎屋も浸水、清滝川、岡部川が氾濫し、砂、岡山でも出水、危険な状況になった（註 18）。7月1日には大暴風雨で午後5時頃本泉寺の警鐘が非常を報じた（註 19）。7月4日によりやく水が引き始め、完全に引くまで一週間ほどかかった（註 20）。被災者は家を失い慟哭し、幼児は親を尋ねて号叫彷徨し、親は子を検索して狂奔し、筆舌に尽くしがたい惨酷さだったという（註 21）。



第9図 『浸水日誌』標題紙

（3）『浸水日誌』の記録と防災意識

『浸水日誌』には、「附言」として、なぜこの記録を残すことにしたのかが記されている（註 22）。これによれば、まず「抑天ニ不時之災害ヲ起ス有り 地ニ不定之異変之生スル有り」として、台風や豪雨など天候が関係して起きる災害と、地震など地盤に異変があつて起きる災害があることを述べている。そして、「天之為セル禍ハ免ル可カラズト 宜ナル哉 頃間 天其人ヲ憐愍スルノ心無キ乎 将タ禍ヲ降シテ 此人ヲ警戒ゼシメンガ為メナル乎 知ラズ」と、天災に対するやるせなさを「天には人を憐れむ心はないのだろうか」と吐露している。

そののち、「本年六月十七日非常ノ大洪水…」として、洪水の概要を述べ、「数十萬ノ人民其害ヲ被ル 実ニ酷シ」と伝えている。その後「余等此変ニ遭遇シ 聊カ見聞スル所ヲ縷述シ 水害日記ヲ綴リ 後ノ記憶ト為スコト爾リ矣」と結んでいる。大変な災害に遭ったため、「後の記憶と為す」ため、この『浸水日誌』を執筆したのである。日常生活が続けていると、我々はともすると災害が起き得ることをしばしば忘れがちであるが、このような記録が残されたからこそ、そこから教訓を得て、将来の災害にあらかじめ備えることができるといえる。

このように、『浸水日誌』は、「附言」の内容から、明治18年淀川洪水の災害状況を後世に伝えるという明確な目的をもって執筆されたことがわかる。執筆者自らが当初人から災害の報を伝え聞いた際、それを信じることができなかったことをも詳細に記録しており、まさに正常性バイアスが働いたことを示す河図洛書といえる。災害のことを記録にとどめることで後世の教訓とするというその防災意識はたいへん高く、同時代の一級資料として評価できるだろう。

4. 災害痕跡・記録と防災

以上のとおり、北河内地域のうち主に四條畷市域を中心とした災害痕跡および災害記録について検討してきた。考古学的調査では、弥生時代～奈良時代の間に動いたとみられる断層の検出や、南海地震により引き起こされたとみられる液状化現象の痕跡の検出事例があった。現代の技術を使った災害の被害予想だけでなく、実際にその場で起こった事例を提示することで、その情報がより現実味を帯び防災の意識を高める資料となりうるだろう。

文献の記録では、権現川流域の災害において江戸期と昭和期で同じ状況の事例を確認した。詳細経過まで同一の経過を辿っており、過去の災害を複数検討することで、防災対策上の知見を得ることができることを示す事例である。

明治 18 年淀川洪水を記録した『浸水日誌』は、四條畷市葦屋における災害状況を中心に記録していた。その記述は迫真性の高いもので、災害の報に接した人の心理をも克明に記録しており、災害状況を後世に伝えるという明確な目的をもって執筆された好資料であるといえる。

このように四條畷市域を中心に考古学的な災害痕跡の事例と文献による災害記録を複数検討することで、防災につながるいくつかの知見を得ることができた。今回は詳しく述べなかったが、北河内地域ではこれら以外にもいくつかの災害痕跡および記録が知られる。今後はより広域の資料を対象にした検討が必要であろう。

註

註1 本稿は、實盛、田中の協議に基づき、はじめにと、第2、3章を實盛が、第1章を田中が、第4章は両者共同で執筆し、全体を實盛が編集した。

註2 「御役所録・南野村」『四條畷市史』第二巻（史料I） pp.237-238 （番号と下線は発表者）

南野村は石高 1500 石の大村とされ、滝村、木間村、畑村、中津川村、川崎村など、いくつかの小集落に分かれていた。なお、本史料の解題は、（山中 2022）によるところが大きい。

一天明六年午六月十三日此日五ツ時分より天気悪敷、雨少々ふり其夜暮六ツ時より神鳴少々なり。白雨京足くらしいくへニも恐入候。何様ニ候、段々降張相成何れの川々水増堤野手道橋悉ク押流、山内崩出候。土砂水惣一駄にして一向可申止様無之、十三日夫所に鏡太鼓打、人寄有之候得共、銘々命ニ掛ケ難儀、目前ニ有之子有者親有者互ニ小高キ所へ上り、牛馬其外他所之道落相成かたく、田畠修理之ため命にかけ野山へ罷出、彼是悪水流出し放候得共、中々力不及、①第一番山内大原割鈴原之北駄之山ニ而水覆中、格別之水出ル。②第貳番地藏堂谷より崩出し、③第三番飯盛山北原ニ而、滝村弥兵衛山下ニ音右衛門与申水車稼渡世仕候者有之候。此者居宅之六拾間上より崩落、依之権現川関留、然共暫クハ其俟有之候得共、無程壺度ニ崩落、右音右エ門居宅水車一件不残流候。第三番三郎右エ門と申者水車稼場先ニあり、宅車稼一件悉ク流ツ候。④第四番南野村中野村立会分石其外石細工之物、是又悉ク流候。⑤第五滝村半右エ門水車場土蔵式ヶ所高キ石垣尽ク流候。相続て井出共不残流候。⑥畑弥勒寺石垣格別之高キ石垣なれ共皆崩流、夫より下へ式丈程堀申候。⑦第六番畑藤右衛門居宅地床共流候。第七番畑喜三兵衛居宅屋敷八歩通り流候。第八番同所孫右衛門居宅流候。尤屋敷藤右衛門屋敷也。四歩通り流候夫より中津川村迄退、⑧井出道橋尽ク流一駄也。土砂ニ相成候中津川太郎左エ門、五左エ門両家右悪水流込、三尺四尺程砂入、広太之日数難儀仕候。同所喜兵衛家は又一向其俟なかし候。⑨第九番川崎池南堤南へ切落申候。夫より南池之内へ切込、⑩京海道筋六拾間程切落道成り一向無之候。其外郷内所々之崩所、切所数多之事ニ候ゆへ、書取置候折節、藤左衛門、惣兵衛、与兵衛右三人出坂、尤四ヶ村立会ニ而殿様御用事も御座候得共、十四日明六ツ時飛脚参り夫より御番所掛り、与兵衛まかせ罷歸り右兩人流所切所之場所及見、⑪尤中津川紺屋治右エ門伴廿壺才ニ成ル男子壺人斗流、其外二人損し無御座候。右死骸ハ北条村西ノ切所流込、右断申入候、此方より死骸取寄葬

礼仕候。役人共立会書付相認メ、則右様子申役所御訴申上候。御見分奉願上候。依之早速ニ御出被成候。所々御一覽之上被成候て、御当わく之様子江戸御窺ニ罷成候得共、日数相立候ゆへ普請方野業と手わけ仕候。双方御勤メ申候。先初ニ井手へ井出ヲ上、井溝筋へ用水引わけ、是を己第一と働申候。都而百姓御役所庄屋年寄広太之難儀候、殊ニ当村之儀は北条村分水中野村分水何事も任心相成候段、村々郷々数多之内格別六ヶ敷場所ニ候間、及古年ニ何事茂村中万事相談之上、庄屋年寄惣百姓中宜敷老人ニ而茂、了簡違ニ有之他所へ同心之者無之様常々相談一決之事ニ候。浮世之人口ニ小家かし火、賤家油断なく大事は小事より始り候事、皆人知る所なれ共、我等始り人沢山とおもふ事大キ成誤りなり。困窮之人あとして随分氣ヲ付、友々ニ相続致合事肝要也。此年殿様より麦ヲ百姓方へ被下候

註3 前掲註2下線部①参照。

註4 前掲註2下線部②参照。

註5 前掲註2下線部③参照。

註6 前掲註2下線部④参照。

註7 前掲註2下線部⑤参照。

註8 前掲註2下線部⑥参照。

註9 前掲註2下線部⑦参照。

註10 前掲註2下線部⑧参照。

註11 前掲註2下線部⑨参照。

註12 前掲註2下線部⑩参照。

註13 前掲註2下線部⑪参照。

註14 権現川流域の被害状況詳細については、主に以下の3つの史料と、(實盛 2022)に掲載した個人蔵の写真資料がある。

①山口 博 1972「十三号台風の襲来」『四條畷市史』第一巻 pp.752-754 四條畷市

古老の言として次の聞き取り内容を掲載。

「あれ程の荒廃は自分としても初めての事、権現川は勿論、清滝川・岡部・讃良川も氾濫し、向二附近の清滝川筋でさえ、堤防より一尺程までに土砂堆積、為に河水は溢れて域下水田の殆んどに浸水する始末、併し、惨害を極めたのは権現川流域、各所に起った土砂崩れ、洪水は河添いの水車十四・五軒を倒壊させ、流出家屋が河水氾濫を呼ぶ結果となって、川崎地区は洪水の渦となり、床下浸水相次ぐ状態となった。」

②室池土地改良区事務局 1993「室池古池西堤塘の改修」『永遠にめぐみを』室池土地改良区解散記念誌 pp.6-7 四條畷市室池土地改良区

「(昭和28年台風第13号は)当地方においても未曾有の被害をもたらし、特に権現川流域における山腹の崩壊、水車池の崩壊等が相次ぎ発生、河川の氾濫による家屋の流失或は倒壊、又、田畑の流失、埋没等々その被害は極めて甚大であった。当時の事務責任者として、常に改良区の運営に情熱を傾注され、当日も現地に赴かれた故末廣定吉氏の記録によれば、その惨状について「正にこの世のものとは思われざりし」と記されていることからみても想像を絶するものであったことがうかがえる。」

③「災害復旧工事記念碑」(四條畷市南野用水組合、昭和45年建立)

碑文の内容は下記の通りで、(實盛・田中 2023)による。

「昭和二十八年九月二十五日此地方を襲いし台風十三号の未曾有の豪雨により各河川共に氾濫堪大なる被害をもたらせり 分ても権現川流域は東部山野の崩潰加わり家屋の流出埋没を初め想像を絶す被害を蒙りただ悲惨の一言に尽きる外なし 更に翌二十九年又しても大雨の迫打に合い流域農業用施設は総て其機能を失ひ只茫然と見入るのみなり 其後町當局を初め関係機関の指導と援助もとに地区民一同挺身之が復旧に当る 概要は城金堂 木間 川崎の各池を初め幹線水路五ヶ所取水井堰五ヶ所に及び事業費総額壱千六萬円を要したり 今夏七月一日附を以て市制が施行され四條畷市が誕生せしを機に當時の危難を顧りみて茲に之を記す」

註15 『浸水日誌』明治18年6月18日条 (『四條畷市史』第三巻(史料Ⅱ) p.366)

裏手之堤上ニ立ち居リシニ、一人南方ヲ指シテ走ル者アリ。是レヲ問ヘバ、答ヘテ曰ク、淀川堤坊伊加賀村之領内ニテ切レタリト。余其実ヲ信ゼザルニ、復一人南方ヲ差シテ疾走ス。又、之レニ問ヘバ、前言ノ如シ。

註16 『浸水日誌』明治18年6月18日条 (『四條畷市史』第三巻(史料Ⅱ) p.367)

正午十二時ニ至リ、当村管轄戸長役場ノ小使、遽シク走り来リ告ゲテ曰ク、牧方ニテ淀川崩堤ハ実ナリ。決シテ

遅緩ス可キニ非ラズト、始メテ其实ヲ知ルニ至ル。

註 17 『浸水日誌』明治 18 年 6 月 18 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.367)

余ガ父、門真四番村土井氏(親戚ナリ)へ、諸家財取片付ノ為メ、人夫ヲ傭ヒテ至ルニ、家内静然タリ。唯道路崩堤如何ヲ談話シテ通ルノ人アル而已。然レトモ余ガ父、瀕リニ家財取付之利アルヲ解クト雖トモ、主人緩漫敢テ騒ガズ(未ダ崩堤ノ信ヲ措カザルカ故也)。(中略) 午後第三時頃ニ至リ水先洶々門真四番村之低地ニ浸入シタリ。干茲至リ始メテ其实ナルニ驚キ、周章顛転シ、狼狽其為ス可キニ迷フ。寝耳ニ水トハ是等ヲ謂ワン。

註 18 『浸水日誌』明治 18 年 6 月 29 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.372)

前日ヨリ小雨止マズ、午前十一時頃ヨリ大雨篠ヲ乱シテ、降り来リタルヲ以テ、人々大ニ苦慮セシニ、午後二時頃ニ至リ当村字(南ノ側、西ノ側、東之側、沖)等ノ地所水ニ浸リ、一面之池ト変ジ、清滝川岡部川大ニ出水シ、午後十時頃ニ至リ、岡部川ニアル養水樋ノ近傍危殆ナリシガ、幸ニ無事ナルヲ得タリ。砂岡山小路高宮等ノ諸村モ、山川大ニ出水シ、為メ一時ハ危ブカリシガ、是又諸村無事ナリ。

註 19 『浸水日誌』明治 18 年 7 月 1 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.373)

午前八時頃ヨリ大暴風雨、前日ヨリ漸々増加シ来ルヲ以テ、拙家々財取片附ニ従事奔走セシガ、午後五時頃ニ至リ、当村寺院備付ノ警鐘隠々非常ヲ報ジタリ。

註 20 『浸水日誌』明治 18 年 7 月 4 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.375)

午前第八時ニ至リ、庭中大方水引き去リタリ。然レドモ、門前及ビ裏街道デ、水壹式尺アリ。

『浸水日誌』明治 18 年 7 月 10 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.377)

本日ニ至リ、当村字南ノ川ノ浸水引き去リタリ。

『浸水日誌』明治 18 年 7 月 11 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.377)

此日拙家持地堀溝村領ハ、漸次水引き去ルヲ以テ、

註 21 『浸水日誌』明治 18 年 7 月 3 日条 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) p.375)

午前第十時頃、南方ヨリ帆ヲ揚ゲ来ルヲ見ルニ(テントウト称スル舟)、当村字細工前ヨリ宇杭ヶ淵ヲ經、新堤ヲ越ヘ(新堤ノ深キ所ニテ水四尺余アリ)、宇三百歩ニ着シタリ。就テ之レヲ見ルニ、人民救助船(大阪府ヨリ出セシ救助船)ナリ。舟中七八十人乗リ込メリ、是レ皆ナ浸水ノ為メ、屋上或ハ樹上ニ攀ジテ、助ケヲ求メシ人々ナリ。中ニハ夫婦所ヲ異ニシ、或ハ親子居ヲ失ヒテ慟哭スルアリ、幼児ハ親ヲ尋ネテ号叫道傍ニ彷徨スルアリ、親ハ其子ヲ索鑿シテ狂奔スルアリ。其慘酷ナル実ニ筆紙ノ能ク及ブ所ニ非ズ。豈憐愍ノ至リナラズヤ。

註 22 『浸水日誌』附言 (『四條畷市史』第三卷(史料Ⅱ) pp.365-366)

抑天ニ不時之災害ヲ起ス有リ、地ニ不定之異変之生スル有リ、物ニ表裏アリ、木ニ榮枯アリ、人ニ盛衰貧富アルハ理ノ正ニ然ル処、数之以テ免レザル処ナリ。語ニ曰ク、人ノ為セル災ハ尚逃ル可シ、天之為セル禍ハ免ル可カラズト、宜ナル哉。頃間、天其人ヲ憐愍スルノ心無キ乎、將タ禍ヲ降シテ、此人ヲ警戒ゼシメンガ為メナル乎、知ラズ。本年六月十七日非常ノ大洪水、是レガ為メ、河内国茨田郡伊加賀郷領内(切レ所ハ、淀川沿堤最上ノ処ニシテ、堤防近辺畑地ヲ覆ヒ、堤防ト并ヒ高く、往古ヨリ如何ナル大水アリト雖モ、破壊スルノ慮ナキ所ニシテ、依テ、水下ノ人民危心ヲ抱ク者更ニ無カリシニ、今此所ニテ破壊セシハ時ナルカナ)、淀川堤坊破壊シ、家屋流失スルニ至ル。依テ、官大ニ土功ヲ起シ、水下ノ人民ヲ徴役シ、昼夜ヲ論ゼス防禦ニ尽力セラレ、同月二十九日ニ至リ、築堤(此時、内務省土木局員及ヒ大阪府土木課員出張シ、各一部ヲ分担シ、知事及ヒ大小書記官ノ内、日夜交代シ、役夫シ、指揮シ、大ニ防禦ニ奔走、尽力セラレタリ。)既ニ成功ニ垂ントスルニ、天時ヲ仮サズ、復々非常ノ大暴風雨ヲ起シ、是レガ為メ、琵琶湖溢出シ、宇治、桂、木津、鴨ノ諸川流出シテ、淀川ニ注グ。情イ哉、曩ノ工役無功水泡ニ属シ、復々大水、滔々田家ニ汎濫シ、河州茨田讀良若江洪河、及ビ、摂州東成西成ノ諸郡、大阪四区ニ溢レ、家屋流失人畜死傷シ、数十萬ノ人民其害ヲ被ル、実ニ酷シ。余等此変ニ遭遇シ、聊カ見聞スル所ヲ縷述シ、水害日記ヲ綴リ、後ノ記憶ト為スコト爾リ矣。

明治十八年十一月一日

山口米太郎誌

引用・参考文献

大阪府編 1954『昭和二十八年台風第十三号災害誌』大阪府

大阪府 2013『震度分布・液状化可能性』平成 25 年 8 月算出(2024 年 8 月 29 日閲覧)

https://www.pref.osaka.lg.jp/o020080/kikikanri/keikaku_higaisoutei/sindobunpu_etc.html

- 小浜 成 1996「雁屋遺跡」『発掘された地震痕跡』埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会
- 近藤 壽 1972「集落と人口」『四條畷市史』第一巻 pp.824-854 四條畷市役所
- 佐久間貴士 1995「四條畷市雁屋遺跡の発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第32回）資料』
- 四條畷市防災会議 2023『四條畷市地域防災計画』令和4年度改定 四條畷市
- 實盛良彦 2022a「市内で栄えた水車製粉業」『四條畷市史』第六巻（民俗編） pp.169-178 四條畷市
- 實盛良彦 2022b「明治以降の災害」『四條畷市史』第六巻（民俗編） pp.504-511 四條畷市
- 實盛良彦・田中香里 2023『天ニ不時之災害ヲ起ス有り 後ノ記憶ト為ス 一遺跡と記録にみる災害と防災一』四條畷市教育委員会・四條畷市立歴史民俗資料館
- 下川浩一・寒川 旭ほか 1997「生駒断層系の活動性調査」『平成八年活断層研究調査概要報告書』工業技術院地質調査所
- 武岡充忠編 1931『淀川治水誌』淀川治水誌刊行会
- 村上 始 2006『一般国道163号の拡幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会
- 室池土地改良区事務局編 1993『永遠にめぐみを』室池土地改良区解散記念誌 四條畷市室池土地改良区
- 山口 博編 1972『四條畷市史』第一巻 四條畷市役所
- 山口 博 1979『四條畷市史』第二巻（史料Ⅰ） 四條畷市役所
- 山口 博 1983『四條畷市史』第三巻（史料Ⅱ） 四條畷市役所
- 山中浩之 2022「江戸時代の災害」『四條畷市史』第六巻（民俗編） pp.498-503 四條畷市
- 淀川左岸水害豫防組合編 1929『淀川左岸水害豫防組合誌』中編 淀川左岸水害豫防組合